神器がほしいって言ったらライドヘイセイバーと知らないウォッチが来たんだが？

原作など知らぬ！

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仮面ライダー好きが行く原作デュアルタイムブレークの転生ＩＦ道…祝え！『ＩＦ（もしも）を司る』ライダーの誕生を！そして選べ！自身が望む最高の世界を！

目次

エピローグ1　デンゲキ（転生）――――1
青いＩＦの戦士と改変と学校――――12
キャラ紹介ととあるＩＦ――――24
一誠死亡!?そして一誠!?死んだ筈じゃ…――――33
俺の力――――44
戦いの狼煙――――56
ハーフな破壊者――――66

エピローグ1　デンゲギ（転生）

よっ！俺は……フーム…まぁ俺の事は”ナナシ”とでも呼んでくれ

ええ？俺の事は良いから現状を言えってぇ？

そうだなぁ…ま！簡潔に言えば……

『『終焉の刻！逢魔時王必殺撃!!』』

『『ハァァァァァァァァァァァァァァァ!!!!』』

『フィニッシュターイム！平成ライダーズ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘヘヘイセイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！…グラーンドジオーウ！アルティメットスクランブルターイムブレーエェェェク!!!』

「シャオラァァァァァァァァァァァァイ!!!!!」

最低最悪最高最善最大最強王の逢魔時王様に鍛えて貰ってるのさぁ!

……かれこれ数千年は殺り合ってる気がするけどなぁお二方からぁぁぁぁの厚うぅぅぅぅい心配…というか過保護で今だに鍛えて貰ってるって訳さ…嬉しい様な泣きたい様な…複雑な心境だよ俺は……

『力の一端とはいぇ、私の力を使うのだ…恥をかかせぬ様に私直々に鍛えてやろう』

『流石にそのままポイッていうのも言うのも嫌でしょ?だからせめて向こうにいっても安心して人を守れる位には鍛えるよ!あ、ゲイツとウォズから貰ったこのトレーニング表を使うからだいぶ厳しいと思うけど……まぁなんか行ける気がするから大丈夫!』

とのことらしく、本当に厳しめで途中泣きたくもなったけど耐えて耐えて耐えて耐えて耐え抜いた結果、今もこうして戦えているので成果は出ているのだろう

そうそう!長く逢様達(誤字にあらず)と戦ってたから忘れてたけど俺が鍛えて貰ってるのには理由があったんだよ

何、簡単な話だ…転生って奴だよ、お前等も聞いたことはあるだろ?ハーレムとか最強とか成り上がりとか…そんなところの奴だよ

良くそういう系の奴だと自分が憧れてる奴とかを特典で神様に頼

めばいいが俺が行く所はそうはいかないらしい

確か名前は……えーと？…ハイなんたらD×Dって奴だ、名前はうろ覚えだがその世界の特長は今でも鮮明に覚えてるよ…
何たってその世界には神話の神様とか悪魔とか堕天使とか天使とか他にもドラゴンとか色々いるんだってよ
それでも脅威で簡単に死ぬ要因ってのに更に神器ってヤベー物もあるらしくそれが本当にチョーヤベェェイ！のさ…もはや特典をミスると即新しい人生ハードモード直行という悲しみ…やはり現実は辛いな

まぁそんな感じの世界に行くんだ、それだったら是非とも欲しいものがあるね
神様とやらはメチャクチャワクワクしてたがその後の顔は今でも忘れられねぇなぁ！

『よし！何が欲しい？』
『じゃぁ神器くれ、変わった奴で目立たない奴』
『……はい？き、君の好きな仮面ライダーの力じゃなくて…？』
『神器』

そ、俺が欲しいのはその神器とやらだ…んん？俺の趣味？仮面ライダーだよ、ライダー！
この喋り方も少しあのコーヒーが地球外生命体のあの人を真似てるんだ…少し胡散臭いけど結構気に入ってるよ
ライダーはジオウを完全に見終わってるがあの令和ライダーゼロワンの事はあまり知らない
まぁそんなこんなで趣味より人生を取った結果……

『よし、変わった神器だね？だね!?それだったらこっちにも手がある

んだよおらぁ！』
『おーバッチこい』
『さぁて何が…ん？何で俺の周りに時計…が…あれ？何で俺の手にライドヘイセイバーが？というかなんで荒…野…に？』
『む、来たか…転生する若き魂よ』
『あ！いらっしゃい！俺、常磐ソウゴ！宜しく！』

二人の王様…というか逢魔様？に出会い、冒頭に戻るって事さ

『『オオオオオオオオオオオオオオオ!!!』』
「シィィィィィィィィィィィィィィィ!!!」
逢様達（誤字にあらず）が完全にこっちを殺す気満々の技を放ち俺はグランドジオウライドウォッチをライドヘイセイバーにセットして更に針を全部回してある
本来ならばアルティメットタイムブレークかスクランブルタイムブレークのどちらかなのだが、このライドヘイセイバーは普通とは違うらしいのだ…よくは分からないが使えるのならばなんでも使ってやる精神なので深くは追及しない
これで逢魔時王必殺撃に対抗できる……が、もちろんこの程度で相手を倒せたら苦労しない…なんせ相手は全ライダーの力を継承した時の王者、そもそもこちらに勝ち目はないのさ…二人いる時点でも勝てるとかんがえられる奴はおめでたい奴だと思うな
だからこそ今の俺が出来ることは…一つ！
「ラァァァァァァァァァシャァァァァァァァァァァイ!!!」
『ほうッ！やはりそう来たかッ！』
『だよねッ！真っ向からだとやられるだけ…だから” 思いっきり自分

より狙いを上にずらして後ろに僕らを着地させて技硬直がほんの少し残っている状態の僕らの背中を狙う”って算段だねッ!?』
「どうせ効きはしないがぁ!それが無意味か無意味じゃねぇか決めるのは俺だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!!!!」
そう、いま俺に向かってきているお二方の技をほんの少しでも俺の後ろへずらすって算段だ…正直、あのお二方に技硬直とか絶対無いけどやらないよりはマシだせめて俺が転生するまでには絶対に一回でもいいから攻撃を当てる!
お二方の技を上にずらす事には成功した…この後はもう一回グランドジオウのアルティメットスクランブルタイムブレークを!と思った時に俺のポケットの中が光り始めた
「なんッ!?あぁもう訳が分からんがやってみるか!」
俺はずらす時にしゃがんだ状態からポケットに手を突っ込んでウォッチを取り出して起動させた
『ーー!』
「あぁ!?何のウォッチか知らんがぁ!」
すぐさま起動させた謎のウォッチをライドヘイセイバーにセットしてフルパワーで後ろにいるお二方を切りつける
『フィニッシュターイム!平成ライダーズ!ヘイ!セイ!ヘイ!セイ!ヘイ!セイ!ヘイ!セイ!ヘヘヘイセイ!ヘイ!セイ!ヘイ!セイ!ヘイ!セイ!……ーー!アルティメットスクランブルターイムブレーエエク!』
「ラーメン食いてエエエエエエ!」
『遂に来たかッ!』
『いや掛け声もっと他にもあったよね!?』
ソウゴさんからのツッコミが来るけどぶっちゃけマジで食いたいです、ブレイドのライドウォッチが無かったら空腹とか老衰で死んじゃって
『おお転生者よ、転生前に死んでしまうとは情けない（無慈悲）』
なんて神様に言われてしまうかもしれないから、そんな訳にはいかないけど普通に食を堪能したいんですよソウゴさん
だけど…だけど今は他の目的を思い出した

「やっと…ぶっ飛ばせた…？」
やっと…そうやっと！逢様達（誤字に以下略）に一太刀浴びせられたのだ！
お二方が崖に突っ込んでいった所は、土煙がもうもうと立ち込めていた…どうなったんだ？
だけどいま一番気になるのはこのウォッチだ
俺はこんなウォッチを知らない…ソウゴさんも驚いてたけど逢魔様は何か知ってる感じだったな
『良くやった、若き魂よ…お前は遂に己自身のライダーの力を手に入れたのだ』
「俺自身のライダーの力…？」
いつの間にかぶっ飛ばした筈の逢様達が俺の後ろにいた
そして俺が手に持っていたライドウォッチがもう一度光った
『イフ！』
「イフ？…もしかして”ｉｆ”か？」
『そう、それは君の力…”もしかしたらあり得たかもしれない世界”のライダーって所かな？』
「もしも…もしかしなくてもこれもしもボッーー」
『それ以上は駄目だ』
「あ、はい」
どうやら触れたら駄目らしかったのだが…俺は手に持つイフライドウォッチを見る
腰にはいつの間にかジクウドライバーがセットされていた
『さぁ、変身するがいい…本来の歴史にはあり得ないライダーよ』
『変身したら転生を開始するけど、何回か時間軸を間違えちゃうかもだから宜しくね！あ、ちなみにちゃんとした時間軸に行ったら赤ちゃんからスタートだけど頑張ってね！』
「え？…まぁ訳が分からんがやってみるか！」
『イフ！』
ウォッチを相手に見せ付けるように構えて起動させてウォッチを上に投げる

そしてウォッチを左手でキャッチしてジクウドライバーにセットし右手でジクウドライバーのロックを解除する
すると俺の周りに大量の時計が現れて全てが違う時を刻んでいる
そして後ろには大きな古時計が中にある二つの振り子を揺らしながら時を刻んでいる
『まさに〝可能性の刻を司る者〟だな…やはりお前は私達とは違う道を歩むのだな』
『まぁあの子には最悪なんて起きない…というか認識してもすぐに解決しそう…流石に日常生活は頑張れとしか言いようがないかな?』
ソウゴはとても遠い目をしているが、そんなことは俺に確認する暇もなかった
まず情報が多いのだ…〝ＩＦ世界〟とだけ言うには相応しい位の量なのだ
しかも小さい変化でもそこから更に枝分かれするからもはや脳が追い付かないのだ

『ま……ず…!?』

『落ち着け、とにかくまずはお前の〝世界〟を見つけるのだ』
『それじゃ!時々話掛けるからその時は宜しく!いってらっしゃい!』

――――――――――――――――――

今俺が何処にいるのかが分からない
このままだと自分が消えてしまうような感じがする

あの時、逢魔時王が言った言葉はなんとなく聞こえた
『自分の…世界…』
俺の世界なんて今まで考えたことがなかった
俺の世界…〟俺だけの世界〟?
違う、それじゃぁ本当に『俺だけ』だ…俺が欲しい世界は…世界は
…
『〟俺〟がいる世界だ』
そしたら、いつの間にか俺は空が変な色をしている荒野のような所にいた

――――――――――――――――

「あ………ぶねぇ…」
変身も中途半端ではあったがちゃんと解けていて色々驚いたが、突然頭の中に逢様達の声が響いた
『お、とりあえずは成功みたいだね』
『無事、自分の世界を見付けられたようだな仮面ライダーイフよ』
「逢様?てことはここは…転生先の…あー?なんたらかんたらＴＴ」
『ハイスクールＤ×Ｄだ、バカ者』
『なんというか仮面ライダーをしながらの俺の高校生活より厳しそうだね…とにかく!頑張ってーー』
逢様達と会話をしていたとたん遠くから何かの咆哮と戦闘音が聞こえ始めた
『カブト!』
俺はすぐにカブトライドウォッチを起動し、クロックアップして現場に向かった
「クソッ!まさか戦争でも起こってんのかよ!?」
『…う〜ん、これだと〟起こっていた〟が正しいかな?』
『ふむ…丁度いいな…イフよ、この先で暴れている蜥蜴共を狩れ』
「蜥蜴ェ!?まさかの爬虫類!?」

ソウゴさんが『そっちに驚くんだ…』って呟いてたけど…あの爬虫類だぞ？流石にそれでここまではいかんでしょ
そう俺は思っていたがすぐにその考えは吹き飛んだ
衝撃波が伝わるくらいには近付いたので確認してみると…

赤と白の龍が様々な種族に囲まれながら戦い合っていた
しかも流れ弾が結構周りにも被害を出していた
「蜥蜴じゃなくて龍じゃん…」
『でも翼を切れば蜥蜴同然だと思うけど？』
『そもそも奴等など私からしたら蜥蜴同然なのだ…好きに呼んでも構わんだろう』
「わぁお、流石逢様って危ない！」
そうこうしているうちにやはりというべきか流れ弾が周りの人にも当たり始めていた…殆どは防げているが小さい女の子の防御が完全に間に合わない光景が目に入った
「カブトでも間に合わッ!?」
その時、俺の頭の中で声が響いた
『手が届くのに手を伸ばさなかったら死ぬほど後悔する…それが嫌だから手を伸ばすんだ』
「ッ!?今の…えぇぃ！訳が分からんが…やってやる！」『ハイパーカブト！』
『Ｈｙｐｅｒ　ｃｌｏｃｋ　ｕｐ』
そして俺は走りながら手を伸ばして、手のひらに現れたハイパーカブトライドウォッチを起動させた
すると周りは止まった様に時間が遅く…いや、自分がそう錯覚するくらい速く走っていた
女の子を抱えて初めてその子が魔法少女みたいな格好をしていた事に気付いたけど、とにかく攻撃が当たらないところへ避難した
『Ｈｙｐｅｒ　ｃｌｏｃｋ　ｏｖｅｒ』
「ふぅ…大丈夫か？魔法少女さん？」
「あ…ってえ？なん、え？私抱えられてる!?」

「よく分からんがなんでこんな危ない所に女の子が…？」
お互いがお互い自問自答と疑問を浮かばせたりしていると、何かとてもイケメンな男が走ってきていた
どうやら女の子の知り合いだったらしいので女の子を預ける事にした
「セラフォルー！」
「サーゼクスちゃん!?これどういう状況なの!?」
「あ、ひょっとして保護者の方？駄目ですよこんな危ない所に女の子一人にしてちゃ」
「あぁ、すまな…待ってくれ君はひょっとして人間なのか!?何故人間がこんなところに？」
イケメンの人が凄い困惑しながら聞いてきたけど…これどうしよう、なんか逢様からの連絡も消えたからお前の好きにしろって意味なんだろうけど…
いやまて、こんなときに使える言葉があった！
俺は少しの間悩んでこう答えた
「悪い、忘れた」
「わ、忘れた？まさか記憶喪失って何処にいく気なんだ!?」
「あの蜥蜴共を黙らせる」
龍の方に歩きながらそう言ったら周りがシーン…となった気がした
あれ？俺なんかやらかしたか？
とにかく、俺は歩きながらイフライドウォッチを起動させた
『ジクウドライバー！』『イフ！』
『おい人間！貴様いま俺の事を蜥蜴といったな!?』
『流石にそれは無視できんな…おい、訂正するなら今のうちだぞ？』
「お前達がそう思っても俺はそう思ってないんでする気はないかな？」
立ち止まって二体の蜥蜴と向かい合った
そのままウォッチを投げてキャッチしジクウドライバーにセットしてロックを解除

そして構えをとる…構えはどちらかというとウォズさんの逆バージョンみたいなもんだ
もちろん周りの時計も出てきて後ろの古時計は鐘をならしている
思えば変身時の音は俺だけ古時計の鐘の音だけなのが気になるけど取り敢えず右に置いておいた
「変身!」
『ライダータイム』『仮ー面ライダー!・イフ!』
音声は初期フォームジオウのカメーンライダーの仮面の伸ばしが変わったくらいで、姿はジオウⅡで赤いところが青くなり背中には牙狼の黒いマント、腰にはマッスルギャラクシーの白い奴が着いている
『貴様…何者だ?』
「俺か?俺は仮面ライダーイフ、本来は存在しないＩＦのライダーさ…以後、宜しくな」
仮面の中で笑いながらそう龍達へ言い放った

青いＩＦの戦士と改変と学校

「俺か？俺は仮面ライダーイフ、本来は存在しないＩＦのライダーさ…以後、宜しくな」
　周りが唖然とするなか俺はマントを震わせながら…っていうのか？まぁマントをバサバサさせながらよろしくしといた
『ふ…多少豪華だが、私自ら祝おうではないか』
「えちょ『祝え！』あちゃー」
「な、なんの声だ!?」
『全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来、更には平行世界を司る新たな時の王者。その名も仮面ライダーイフ。まさに誕生の瞬間である…そして誕生の日。仮面ライダーがこの時代に現れた日。それは歴史の終わりか。それとも始まりか。選べ！我々自身の未来を！』
　俺は堂々と立っているが、内心すごく恥ずかしかった…
　なんというかこの自分のおじいちゃんがハッスルしすぎて突然孫自慢が始まるような感じ…なんかソウゴさんがいっつも黒ウォズさんに祝われてる時の感情が分かった気がする
　なんか赤い龍が凄いプルプルしてるけどどうしたんだろうかと思ったら突然笑いだした、なしたなしたよ
『ふはははははは!!仮面ライダー？時の王者!?これは大きくでたものだこんな面白い人間は初めーー』
「ーーは？」
『ッ!?』
　今なんて言ったあの蜥蜴…笑ったな？俺を鍛えてくれた…あの…あの優しい王様達を…
「おいおいおい？ずいぶん大きく出たな蜥蜴風情が…てめぇがあの人

達を…王様達を笑っていいのは俺をぶっ倒してからにしてくれよなぁ？」『ライドヘイセイバー！』
　これは流石に看破できない俺からしたら仮面ライダーファン全員からライダーキックされても可笑しくない発言をあいつはしやがった…しかも俺が威圧するまであの白い蜥蜴も微かに笑ってやがったな…
　俺は少し苛つきながら蜥蜴共に挑発した
「ほら…来いよ」
『ッ!?ならば喰らえ！』
　赤い蜥蜴が炎を吹いてくるが、突然俺の目の前で止まって逆に炎が大きくなり赤い奴に飛んでいった
『何!?ぐぁ!?』
『バカ者！一人で突っ込むから駄目なのだ！今だけ協力してやるから力をーー』
「そうだな…なら折角だ」
　俺はクローズライドウォッチを起動してライドヘイセイバーにセットし、更に針を動かして龍騎に合わせる
『クローズ！』『フィニッシュターイム！ヘイ！龍騎！』
　すると何処からともなく赤い龍…無双龍ドラグレッダーが現れ、さらにライドヘイセイバーからは蒼い炎が吹き出すと俺の隣で龍の形を型通り控えていた
「さてと…力を合わせてどうぞ？」
『ま、待ーー!?!!』
「すまんが今の俺は最初っからクライマックスなんだ…行け」『スクランブルターイムブレーク!!』
　二体の龍が咆哮をあげながら二体の蜥蜴に食らい付きに行った…何やら悲鳴の様なものが聞こえるが無視してライドヘイセイバーを地面に突き刺し、ベルトのイフライドウォッチを押してロックを解除して一回転させる
『グガァァ!?』
『ま、待ってくーー』

「そうか…知らん」『フィニッシュタイム！』
どうやら炎が完全に消えてはないらしく苦しんでいたので解放してやることにした…あれ？俺いま悪役になってね？
そんなことを思いながら俺は奴等の周りにそれぞれ違う時計が現れ全部同じ時を刻んでいる
そして俺の目の前にも似たようなものが現れ、その時計にライダーキックを放つ
「はぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」『タイムブレーク!!』
『『がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?』』
その時計に突っ込むと、奴等の周りにあった時計から俺が飛び出してキックを放って元いた場所の後ろに時計が現れてキックを放った格好のまま地面に着地した…いわばアクセルフォームのファイズのクリムゾンスマッシュみたいなものだ
二体の蜥蜴はそのまま地面に倒れ伏した
俺はそれを確認してからあの子の方へ歩いていった
『ふむ…何をする気だ？』
「逢様ですか…何、ただの確認です」
周りにいた全員が警戒しながらこっちを見ていて、あのイケメンの人と女の子が緊張した顔をして待っていた
俺は二人の前に立って女の子の目線に合わせるようにしゃがんだ
「…怪我はないか？」
「あ、ひゃい！」
女の子が噛みながら返事をしたのを少し微笑ましかったのでちょっと笑ってしまったが、俺は女の子の頭を撫でておいた
「あ…」
「そうか、なら良かった…あなたも、この子を…仲間を…友達を…後悔しないようにしてください、手が届くのに伸ばさなかったら…更に後悔しますから」
「あ、あぁ…分かった」
俺は立ち上がって二人に背を向けてから空を見て、手を上げて時間軸を飛ぶ準備をした

「あ、あの!また何処かで会えるでしょうか!」
　飛ぶ前に、女の子からの呼び声が掛かったので首だけ後ろに回して女の子を見て俺は少し悩んでからソウゴさんのおじさんの言葉をちょっと借りた
「時計の針は進むこともできるし巻き戻すこともできる…だけど時間や人生はそうはいかないさ、だけど一度来たチャンスを逃すともう二度とチャンスは来ないかもしれない…いま君が俺に声をかけてまた会えるかと聞いたんだ、絶対に会える…だからあとは君が信じていればまた会えるさ」
「…はい!」
　その返事を聞いたら、俺は手を下げて上で展開していた時計を下ろして中にはいった

――――――――――――――――

(…ん?なんかおかし…い?)
「見てください!元気な男の子ですよ!」
「お　ぎやぁぁぁ!　お　ぎやぁぁぁ!」(な　ん　じ　や　ぁ　こりやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?)
「はぁ…はぁ…敗北者ぁ?取り消しなさいよいまの言葉ぁ!」
『落ち着いてくれ母さん、ただのフォースの妖精だから』(ガラスの向こう側)

――――――――――――――――

ちょっとしたトラブルから数年…今では幼稚園に通ってます…辛かった、辛かったよソウゴさん…逢様…途中哀れんで話相手になってくれて本当にありがとうございますあのままだと間違いなくヤバかった

なんとまさかの時間軸移動したとたん赤ちゃんになるとはおもわなんだ…自前には聞いてたけど数年ほど取り乱してたらしい、あっぶかったじぇ

そんで俺の名前は『逢魔牙刻』だ、改めて宜しくってか？

読み方はおうまがとき…これ完全に逢魔時（おうまがとき）だよな？

母親は逢魔時乃（おうまときの）でとっても優しくて過保護だった…だから母さん俺に危ないからって魔術を教えないでそれテイルズとかＦＦの奴じゃんしかも教えられるの全部ヤバいけど覚えちゃったよ!?メテオとかどうすんの!?パワーをメテオに！すればいいの!?誰が良いですともするんだよ!?

親父は逢魔王者（おうまおうじゃ）…一言で言えば王者、なんか外に一緒に見回りにいったときはぐれ悪魔なるものを一瞬で殺してた

だから父上…まだ赤子の俺を立たせて『殺れ』なんて言わないで？はぐれさんも困惑してたでしょ？時々嬉々として襲ってきた奴も居たけど取り敢えず近くにあった先のとがった鉄パイプを喉にさして倒したけど『歩けるようになったら素手で倒せ』なんて言わないで父上、なんか幼稚園に入る頃にはカブトが出来るようになっちゃったよ後ろ向いて回し蹴りしてから上を指すしちゃったよ

「はぁ…つかれた…それにちょっとこわい」

「イリナちゃん、イッセーがつかれてるからそろそろやすも？」

「いえ！もうちょっといくよ！」

そんで今は幼稚園の友達…兵藤一誠ことイッセーと行動力が男の子で男気溢れる女の子こと紫藤イリナと一緒に森の中にあるらしい

教会に向かっていた
　なんでこんなことしているかというと、突然イリナが
『お父さんがさいきんくらいかおしてて、なんかちずにもりのきょうかいにあかいまるがついてたから夜にいってみよ！』
『う、うーん良いのかな？そんな夜中にいって…』
『だいじょうぶ！がときがいるじゃない！』
『え!?おれもいくの!?』
　てなことで幼稚園最後の思い出として行きたいと涙目で言われてしまったので着いてきた…のは建前だ、こいつらにはここで帰ってもらう
　あぉーーん
「ぴぃ!?」
「ひゃぁ!?」
「あ、これはあぶないかもだから帰ろ！」
「うん賛成！」
　皆で森の外まで引き返して二人を家に帰した

　俺は空間移動を発動して森の教会の前に立つ
「さて、いまこの中ではイリナの親父さんが悪魔に恋をしてしまった同僚を殺そうとしている…」
　俺は堂々と中にはいってずかずかと奥に進んでいく
「同僚が恋をしてしまった悪魔はゴシップに詳しく、ある時悪魔の王の駒の話を聞いてしまい、この先悪魔に無慈悲にも粛清されてしまう」
　さっきまでなっていた争う音が消えたがそのまま歩きながら現場に向かう
「そして八重垣正臣は紫藤トウジに粛清されるが先の未来、また蘇りこの事件の関係者を襲っていき最終的には消滅する」
　扉まで着くと思い切り開けて、剣を構えていてどちらもボロボロの状態の八重垣正臣と紫藤トウジがいた
　二人ともなんで子供がと思っているがすぐに構え直し俺を警戒し

はじめた
「…何者だ」
「なに、ただのガヤさ…究極のな」
「なにをーー」
「俺はあんたの恋、なんとかできるかもしれんって意味さ…面倒事は知らない他のやつらにやらせる、俺からしたらこの事件はどうでもいいんだが…あんたの恋の行方、見たくなった」
　二人ともずいぶんと驚いていたが無理もない…突然現れた人間の子供が悪魔と教会の者の恋を許しているところもあるがもっとも驚いていたのは恐らくなんとかできるというところだろう
「さて、俺を邪魔したいなら全力できな」『ライドヘイセイバー！』
「は！」
　そしたらトウジさんがいきなり斬りかかってきた…敵と判断したら容赦なしのようだ
「紫藤さん!?相手は子供ですやめてください！」
「君は！イリナの友達の牙刻君だろう!?何故悪魔と教会の者の恋を許しているんだ!?」
「…俺は恋を許しているのはついでだ」
　トウジさんは俺に斬りかかりながら話を聞いていた、もちろん俺は全てをさばききっている…聖剣の能力は俺には無意味だから意味はない
「俺がいまあんたと戦っている理由は何故あんたは友なのに彼を助けず戦うことを選択したのかだ」
「それは！」
「これだけはいってやる！俺は人の未来を邪魔することが大嫌いなんだよ！俺は見たんだよ彼が悪魔の彼女と幸せに笑顔で暮らしている未来を！だから俺は戦う、人の未来のために！」
「君に出来るというのか!?彼の…叶わない恋を結ぶことを！」
　俺は大声でそれに返した
「出来るか出来ないかじゃなくて！やるんだよ！」
『ヘイ！アギト！』

ライドヘイセイバーの針をアギトに合わせて構える
トウジさんが雄叫びをあげながら突っ込んでくる
俺はトウジさんの聖剣にライドヘイセイバーを当てて滑らせて腹に当てる
「…なら…彼を頼む…」
「任せろ！面倒事は任せた！」『デュアルターイムブレーク！』
ライドヘイセイバーを横に振ると突然青い風が竜巻を作りトウジさんへと突っ込んだいった
トウジさんは青い竜巻に吹き飛ばされ教会の壁に叩き付けられて気絶した
「さて…八重垣正臣さん？」
「ッ!?」
「彼女さんと彼女のお仲間さんと一緒にうちの家に来ます？」
「……はい？」

――――――――――――――――――――

『ふむ…流石にいつまでも原作を始めない訳にもいかんだろう…少し時を飛ばそうではないか』
『早く牙刻君の高校生活を見てみたいからね！皆ごめんね！』

――――――――――――――――――――

はい、何回目か分からない自己紹介ですが逢魔牙刻です
今現在、我が家『クジゴジ堂』にはヤバい両親と『悪魔の彼女と別れる決意をしたが教会の異端と扱われてしまい仕方なく教会を辞めた』八重垣正臣さんと『別れる決意をしたが周りから悪魔の異端として扱われてしまい粛正されることになりかけるが仲間と旅に出るこ

とに成功して人間界をさまよっていた』クレーリア・ベリアルさんとその仲間たちが住んでおります
いろいろゴタゴタは有ったものの家の両親と俺に掛かれば追っ手などただの案山子ですなぁ
その後ははぐれなど狩りながら時間軸移動の練習をしていて神社に行ったり孤児院の様な所で虐殺されてしまった子供たちを見たり生き残りの男の子にちょっとした力を実験で試したり悪魔の領域に王の駒の情報垂れ流しにさせたりと本当に色々ありながらも今を皆で生きています
「んじゃいってきやーす」
「いってらっしゃーい」
「…行ってらっしゃい、今回のテレビの修理は簡単だな」
「なんで時計店なのに冷蔵庫を修理しているんだ…？行ってらっしゃい牙刻君！」
「正臣…それは今私が修理している小型ボーリングマシンを見ても言えるの…？気を付けてね牙刻君！」
クジゴジ堂を出て通学路を歩く
そう、俺は今高校二年の生活を満喫している！ソウゴさんとかが『懐かしいなー』って言ってたけど一体どんな生活を三年生まで続けてたんだ…
あと、イリナが海外に引っ越してしまったのだ…どうやら教会が駒王町から出ていってしまったらしくトウジさんにイリナは着いていった…だからイリナさん泣きながら『また一緒に特訓とかしようね』とか言わないでイリナさんあなたのお父さんが『なん…だと』って顔してるから
トウジさん最近教会関係で胃に穴が開きそうになってるらしいので正臣さんの現状報告と胃薬を送るのが最近の日課になっています
「よぉ！牙刻相変わらず早いな！」
「オマエモナー、んで？お前はなんで朝早くから登校してるのかな？イッセー」
「あのバカ二人がやり過ぎないように止めわるためだよ」

「でも時々一緒に見てますよね？だからお前は周りから『変態二人組のストッパー兼ムッツリスケベ』って言われんだよあほ」
「うぐ…し、仕方ないだろ？あいつらの熱意が強すぎて止めるにも止めらんねぇんだよ…それにちょっと女の体には興味が…」
「そういうところだよアホ…」
　そんなことを思いながら一緒に歩いている熱血漢っぽいやつはあの兵藤一誠だ
　一応これでも学校では人気があって熱血ムッツリ漢と呼ばれて呆れられたり黄色い声援があがったりとか色々ある
　なぜイッセーがムッツリなのかは、小学生低学年の時に一緒に公園で遊びにいったのがこのムッツリの始まりだった…

『牙刻ー、また公園で組み手すんのなー？』
『しなきゃイリナにうわ！私の幼なじみよわ！って言われるからやるよ』
『お、そうだな』
　こんな平凡な（？）会話をしながら公園に行った時…
『紙芝居するぞー！題名は女体の神秘だ！』
『あ、もしもし警察ですか？』
『じゃあの！』
『逃がさねぇ！』
　変なおじさんが紙芝居をやろうとしていて気になったから見に行こうとするのを題名を聞いてすぐに俺は警察を呼んでイッセーが逃げようとしたおじさんを捕まえていた
『く！いいか少年！女の体とはなぁ！』
『知らんから大人しくしてろ！気絶！』
『ぐぇッ!?がく…』
『パーフェクトだイッセー』
　その後は警察につき出した…そして帰り道、事件が起きてしまったのだ
『なぁ牙刻』

『あ?どしたの?』
『……女の人の体ってどうなの?』
『ふぁ!?う～ん（失神）』
『おい!?応答しろ牙刻!牙刻ィィィィィィィィ!!?』
疑問に思ってしまった結果、この現在のムッツリイッセーが完成したのだ…一応末期にはならず普通だったのが幸いだった、そして特訓の成果は大体油断しなければ中級な奴等を相手できるくらい…まぁ例えば恋人のふりとかされて攻撃されたら多分反応出来ないだろうな、あいつ親しくなった奴には緩いから

そんな思い出を振り返りながら学校に入っていくと、門の辺りから黄色い声援が聞こえた
多分、この学校で有名なリアス・グレモリー先輩と姫島朱乃先輩だと思われる
「ん?あぁ、あの人たちが来たのか」
「相変わらず人気だねぇ」
「……そうですね、兵藤先輩に牙狼先輩…おはようございます」
「おうおはよう…うぉ!?小猫（ちゃん）!?」
流れで挨拶したけど、二人で飛び上がりながら警戒体制をとって後ろを振り返ると、小柄の女の子塔城小猫がすこし不機嫌そうな顔をして立っていた
恐らく、限定スイーツを買えなかったのだろう…あそこの限定スイーツをいつも屋上で美味しそうに食べているくらいだからな
…実は昨日その限定スイーツを買って店を出るときに後ろから効果音がつくほど残念がっていた中学生がいた気がするが気のせいであろう
「…牙狼先輩後で屋上です」
「何で!?俺が昨日限定…スイー…ッ…」
「……おっとそろそろ教室に行くわ、また話そうぜ小猫ちゃん」
「はい、兵藤先輩また」

小猫がスッゴい小さい笑顔を浮かべながら教室に向かっていった…周りの男女たちが鼻血を出したり顔を青くしてたりと様々な反応をするなか俺はイッセーと共に教室に向かうことにした

余談だが俺は何故か牙刻とか逢魔ではなく牙狼と呼ばれている

理由はそこらにいた暴走族がこの学校に攻め込んできたときに牙をもつ狼の様に族を叩きのめしたらいつの間にか先輩後輩同級生に牙狼と呼ばれていた…えぇ

キャラ紹介ととあるＩＦ

現在の（候補合わせた）ライダー

牙刻「よぉ！俺だ！牙刻だ！」『イフ！』

イッセー「牙刻金メッキ剥がれてるぞ？」『ｂｏｏｓｔ！』『アークルの起動音』

正臣「罪を背負って、僕は…いや俺は未来を切り開く！」『メロンエナジー…』

クレーリア「私は戦う…悪魔として…愛する人として…ファイズとして！」『５―５―５』

時乃「牙刻を傷付けるなら容赦はしないわ！」『クローズドラァゴン！』『エボルドライバー！』

王者「……久しぶりにやるか、さぁ…実験を始めようか」『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

イリナ「久しぶりね！二人とも！」『Ｒ―Ｅ―Ａ―Ｄ―Ｙ』

??「…いえ、私は確かに堕天使よ…それに愛される為、仲間を助ける為にも人を殺したわ…それでも、死んでいった部下を…仲間をバカにするなら絶対に許さないわ！心火を燃やしてぶっ飛ばす！」『スクウラッシュドライバァァァァァ!!』『グリスブリザァァァァァァド!!!』

??「俺は何度も人を守るために人を殺したし裏切った…だが！例え外道とイカれた奴と精神異常者と言われようと！人を守る…それだけは忘れてねぇ…だから！俺は戦う！例えカードが無かったとして

も…俺に！ライダーとしての資格があるなら!!」『ターンアップ』『ＲＥＶＯＬＵＴＩＯＮＫＩＮＧ』

??「戦争…俺にはそれしかなかった…だが…あの時戦ったあいつらに感じたモノは混沌でも殺意でも悪意でもなくただの純粋な闘志だった…ふ、笑いたかったら笑え…俺はやつらに感化されたのさ……そして初めてだった…戦争が起きている国に行って知ったよ、さっきまで隣で自分の未来を語る未来が明るい少女が目の前で…助けられたはずの命を散らしたのを、激しく後悔したのは…だから俺は決めた、手を伸ばして助けられる命があるならば絶対に手を伸ばす！」『タカ！トラ！バッタ！』

??「俺には魔力はない…だが、俺にはこれがある…母上が言っていた、世界は自分が中心に回っている、そう考えた方が楽しいってな」『ＨＥＮＳＩＮ』

??「偉大なる英雄たち…頼む…！俺に…俺に力を貸してくれ！」『カイガン！オレ！』

??「私のかわいい娘を傷つけたのはあなたね？もしかして相手にならないと思ってないかしら？大丈夫、私は鍛えてますから」『キーン…キーン…キーン…』

??「安心して…私があなたの最後の希望になってあげるわ」『シャバデュビタッチヘンシーン、シャバデュビタッチヘンシーン、』

??「よし！俺らも！」『ドングリ！』

??「おう！」『マツボックリ！』

「「ん？」」『てんてんてんてんけてんてんけ…バカもんアームズ、バッカモーーーン!!』「「ぎゃぁ!?」」

キャラ紹介～！

「んじゃ改めて牙刻だ」

「イッセーだ！」

「イリナよ！」

「イヤー結構頑張ったじゃん作者」

悪いかよ！あ、最後のやつらはあいつらです

「なんとなく知ってた」
「ほら!とにかく紹介よ、しょ、う、か、い!」

逢魔牙刻
高校生　ストレス開発器
備考　仮面ライダーイフ　オーマジオウの秘蔵っ子　孫　大雑把
親思い

逢魔時王
時の王者　おじいちゃん
備考　時の王者　最低最悪の魔王　牙刻を孫だと思ってる　パワフル　ハイスペック　おちゃめ

常磐ソウゴ
時の王者　親戚
備考　時の王者　最高最善の魔王　ストッパー　抜けている　苦労人　タライ

兵藤一誠
高校生　牙刻の幼なじみ　弟子
備考　今代の赤龍帝の宿主　クウガの可能性　ムッツリ　熱血不屈

逢魔時乃
牙刻の母　時計屋の美人さん
備考　転生者　母は強し　王者とは一目惚れ　最近の日課はサンダーブレードやインディグネイション、ファイガやフレアなどを牙刻に教えること　悩みはからだの中にいる地球外生命体が最近とにかく自重をしてくれと言ってくること　クローズとエボルの可能性

逢魔王者

牙刻の父　時計屋の鬼瓦
備考　転生者　理不尽　時乃とは一目惚れ　ヒッテンミツルギスタァイル！　ガトチュジェロシュタイァル！　フタエノキワミアー！　宇宙ＣＱＣ　天ッッッッ才物理学者　ビルドの可能性

紫藤イリナ
幼なじみ　特訓仲間
備考　おんなのこ　行動力フォーゼ　聖女アーシアの会の一員
こんなこともあろうかと　イクサの可能性　好きな人は牙ｊｑ―：―
’？＊^―（ここからは血だらけで読めない）

八重垣正臣
元教会の戦士　時計屋の若者
備考　クレーリアラブ　牙狼（闇照）　新月の可能性　最近家電製品なら全て直せるようになった　悩みはクレーリアの愛の重さ（笑）

クレーリア・ベリアル（偽名　愛歌）
悪魔　旅人（笑）　時計屋の若者の奥さん
備考　正臣ラブ　ラブリカとポッピーのゲームを合わせた奴が使える（ペナルティー）　ハリセン　ファイズの可能性　最近機械全般を直せるようになった

塔城小猫
悪魔　猫又
備考　スイーツ大好き　猫　最近の趣味は屋上で牙刻と日向ぼっこすること　悩みは牙刻が自分の事を猫扱いすること

紫藤トウジ
教会の戦士　胃薬
備考　苦労人　胃薬

くらいです、詳しくは気が向いたらやります（絶対にやらない）
「いやだって日向ぼっこしてるとき小猫から猫耳としっぽでてたから？」
「え、出てたんですか」
「触ったらふさふさささらさらで撫でてたら体がピクピク動いてた」
「にゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」
「てかトウジさんェ…」
「闇照って…正臣さんの家系ヤバくね？」
「正臣さんは牙狼の家系だった…？」
「というか行動力フォーゼって！私は叫ばないわよ!?」
知らんがな、とりま！平凡なとある日どうぞ！

―――――――――――――――――――――

［おじいちゃん］

「ただいまー」「「お邪魔しまーす！」」
「よく戻ってきた、牙刻よ」
「……牙刻、おじいちゃんが来てるよ」
「あ、逢…じゃなくてじいちゃん！」
「あ！牙刻のおじいちゃん！おれ一誠っていいます！」
「紫藤イリナです！がときの友達です！」
「うむ、いい挨拶だ…挨拶は大切だからな、覚えておけ」
「「はーい！」」

「どれ、私が直々に遊んでやろうではないか」
「!?」

――――――――――――――――――――――――――――――――

［スイーツ］

「よし！ギリギリ買えたぜ！」
「売り…切れ!?」
「ん？あの中学生の子ギリギリ買えなかったのか…ま、明日屋上で小猫といっしょに食うか」
「…あれは牙狼先輩…成る程、さては先輩が買ったから買えなかったんですか…ふふ…どうしてあげますかね…」

――――――――――――――――――――――――――――――――

［日向ぼっこ］

「………」
「スー…スー…」（猫耳ピクピクしっぽフリフリ）
「……気持ちよく寝てんな」（頭と猫耳を撫でる）
「ン…スー…ニャア…」（牙刻の手に頭を擦り付ける）
「……俺も寝るか…クー…カー…」
「……牙刻…先輩……スー…」

―――――――――――――――――――

［自販機］

月曜日

「よっとコーラ」（チャリンチャリン）

「…えーと、この月光蝶ドリンクでいいか…１５０円って地味に高いな」（チャリン）

「なに味なんだよそれ…」

「…（ごくッ）……う～ん…月光蝶っぽい感じ」

「いやどういうことだよ!?」

火曜日

「…ＭＡＸコーヒーです」（チャリンチャリンチャリン）

「メラゾーマ缶…？１００円っておま…」（チャリン）

「それって美味しいんですか？牙狼先輩」

「……メラゾーマというよりかはメラ」

「…（首をコテンと傾げる）？」

水曜日

「ふぅ…スポーツドリンクを買うとしようか…僕が奢ってあげようか？」（チャリンチャリンチャリン）

「大丈夫です正臣さん…海水の天然水ってなんだ？１１０円ってのがまたやだな」（チャリン）

「お味は？」

「……これスッゴい海水だよ!!?」

木曜日
「ちょっと喉が渇いたから飲み物を買いましょう牙刻」（チャリンチャリン）
「母さん…卑劣なドリンクってなんだよ…１２０円か」（チャリンチャリンチャリンチャリンチャリンチャリンチャリンチャリンチャリンチャリンチャリン）
「…それって美味しいの？牙刻」
「（ごくッ）…美味しいようで何かあと少しを加えたらすんごい美味しくなりそうな…不味さ…この…うーん…なんと卑劣な！」
「逆に気になるわよ牙刻!?」

金曜日
「少し休憩していこう」（チャリンチャリン）
「最近はぐれ減ったか？…黄金の果実ジュース２００円か…少し奮発するか」（チャリン）
「…いつも思うが何故わざわざ全部十円でいれるんだ？牙刻」
「…前世から何故か十円が貯まりやすい体質なんだよ、察してくれ…（ごくッ）…？」
「どうした牙刻」
「クラック開けられるようになったわ…あとロックシードも」（クラックの開く音）
「!?」

土曜日
「うぅぅ…喉が渇いちゃった…お金ないし教会に戻るまで…いやでも…」
「…はぁ…水とビクトリーウォーター…合計２２０円か」（チャリン×２２）

「…ええ、何あれ…ってうわ!?危ないじゃない！」
「…水やるよ、飲め」
「…ありがとう…一つ聞いていいかしら？」
「なんだよ」
「それって美味しい？」
「土の味がする」
「土の味!?」

日曜日

「…これは、何？」
「こりゃ自販機って言うんだよ…なんか飲むか？」
「我、ジンオウガドリンクなるものが欲しい」
「んじゃおれは太陽缶を…」（チャリン×２５）
「（ごくッ）…」
「…なんか太陽のエネルギーが使えるようになった？」
「…？なにこれは」（ジンオウガ装備）
「解除できんの？」
「…出来た、そしてこれになった」
『にゃーん』（超小型ジンオウガ）
「…大切にしなさい」
「わかった、我、オーフィス、よろしく」
『にゃーん！』

一誠死亡!?そして一誠!?死んだ筈じゃ…

俺の1日は学校へ向かう途中で始まる
俺はいつも大体朝早くから学校へ向かうため、朝ごはんも少し軽めにしているのだが…俺の目的は通学路の途中にある自販機に売っている黄金カレー缶である!
あれは良いものだ何故なら缶といってもなかのカレーがとても温かくどろどろとさらさらの中間あたりで飲みやすく朝の眠気が覚める適度な刺激がサイコー!!
俺はいつもの自販機に向かうと、一人の女の人がボーっとたっていた
しかも知り合いだったので声を掛けることにした
「なにしてんだレイナーレ」
「…牙刻…いえ、少し悩み事よ」
そう、この子はレイナーレという堕天使…らしい
正直いって今まで悪魔とかエクソシストとかいるから多分いるんじゃないかとは思ったが案外身近にいたのは驚きだったよ
レイナーレは俺にそう言いながらポケットに手を入れた…とたんにピタリッ!と止まってカタカタ震えて少し涙目になっていた
どうやら財布をまた忘れてきたらしい…反応がずいぶんかわいいなと思いながらカレー缶を二つ買って一つをレイナーレに投げ渡した
「悩み事があるなら俺が今度聞いてやる…じゃ俺は学校あるから」
「…ありがとう」
俺はそれだけ行って学校に向かった

―――――――――――――――――――――

学校についていつも通り机に座り頭の中で剣を振るイメトレをする

この時だけは周りの皆から『あそこの雰囲気がヤバい』とのことらしく喋りかけてくる人は少ない

相手はコロコロと日替わりだが今日は磁雷矢さんだった…磁光真空剣から放たれる剣技が上手い、そして流石忍者強い

「聞いてくれ牙刻!俺に彼女が出来たんだってまたやってんのか…この時だけは話しかけなきゃよかった…」

「……誰が面倒なやつだって?」

「げぇ…」

ちょうど磁光真空剣を奪い逆にこっちが許さんし終わったところで、勝ち組発言をしたイッセーを見る

友達に恋人ができて憎いけど祝福したい…だが、友人としては…更に特訓仲間から言わせて貰えば何か嫌な予感がしてならない

「…放課後デートでもするんだろ?」

「お?そうだぜ!俺は楽しみだ!」

「…そうか、なら存分に楽しんでこい…それと、”気を付けてな”」

「……おう!」

周りからしたら何がどうなっているか分からないと思うが、俺はいつも嫌な予感がするときはソイツに気を付けろと忠告しておくのだ

イッセーは幼なじみだから今ので俺が何か言いたいのか分かったらしい

それだけ言ってあとはいつも通りの学校生活をして放課後に飛ぶ

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

というわけで俺は今『イッセーがレイナーレに殺される』公園に向かっている

何故知っているかというと、何気なく取り出したジオウライドウォッチで少し先の未来を見ただけである

その後イッセーが悪魔に転生することも知っているので俺はレイナーレに会いに行くことにした

「あらら…アホイッセーだから言ったってのに」

「……牙…刻か?」

「牙刻!?な、何でここに!?」

「おう皆の牙刻さんだぞイッセー、〝安心しろ〟」

「…さよか…なら…大丈夫…か………」

案の定イッセーは血だらけでレイナーレが光の槍を持っていた

因みに俺がイッセーに言った〝安心しろ〟は、お前は死なないって意味なのでイッセーは安心して力尽きた…あと二回は力尽けるじゃん（モンハン脳）

レイナーレは俺の登場にとても焦っているようで、あたふたしていた

「こ、これは…そ、その!」

「とりまこいつは後から来る悪魔が何とかできるから今は逃げっぞ…面倒だろ?それに悩み事聞いてやるって言ったしな」

「…え?…どういうーー」

俺は戸惑うレイナーレに近付いて手を握り空いている片手でエボルライドウォッチを起動する

すると、周りにブラックホールが現れて俺らを呑み込んでいった

俺らはブラックホールに呑み込まれ、次に出たのは人気のない公園に立っていた

レイナーレはまだ困惑しているようなのか、少し泣きそうになりながら周りを見ていた
「ど、どういうこと!?何が起きてるの!?」
「落ち着けー…ほれ、とにかく座ってろ」
俺は取り敢えずレイナーレをベンチに座らせて自販機に向かい水を買ってレイナーレに一本渡して飲み始めた
レイナーレも少し戸惑いながらも水を飲んだ

お互いどう声を掛ければいいか分からないからだいぶ気まずい雰囲気が続いた
俺は黙ってレイナーレが話し出すのを待った
「…牙刻は怒らないの?私が兵藤一誠を殺したこと」
しばらくして、やっとレイナーレが口に出した言葉がそれだった
俺は少し悩んで胸のうちを話した
「う～ん…まぁ多少は怒ってるな」
「…やっぱり「だが」…え?」
「だが、俺は友達がそんなことをしなきゃいけなかった事を聞けなかった俺自身にも怒ってる…何か話を聞けばああはならなかっただろうとか、俺が居ればなんとか出来ただろうとか」
「友…達…?」
そんな『ＩＦ』(可能性)の話をしていると、レイナーレはそんなことをボソッと呟いていた
だからこそ俺は堂々と言うことにした
「なにいってんだ?友達だろ俺ら…友達の悩み事聞けなかったからこうなったんだし…それに彼処には駒王町を管理してるリアス・グレモリーが来る感じがしたから多分イッセーのこと転生悪魔にすると思って放置したし、だから多分生きてると思うぞ?」
「…友達…って待ちなさい、ただでさえ頭の中がこんがらがっているのに更にこんがらがってきたわ…ふー…それでなんて言ったかしら

牙刻」
「え？だからイッセーは悪魔になったって事…どうしたんだ？」
　そしたらレイナーレは少し唖然としたあと何かを悩む素振りをしたあと空を見上げて、唸り声をあげてから手に持っていたペットボトルのキャップをあけて水を飲んで一息ついた
「…まぁ取り敢えず話をするわ…何で一誠を殺そうとしたか」
「アイツの首持ってって上司の地位に行きたかったとかそんな感じだったとか？…んな訳ないか！」
　俺は何となく朝に見た刑事ドラマの内容を思い出して言ってみると、レイナーレがピタッ！っと止まり顔をそらしていた
　…因みに内容はとあるしたっぱ刑事が犯罪者に事件を起こさせて自分がそれを捕まえて給料とか地位をあげることがバレて捕まるって感じだった、下手なB級映画みたいで俺はお気に入りです
「……マジ？」
「……似たようなとこよ」
「……oh…」
　俺は考えた……これどうアドバイスしてあげればいいの？
　俺はレイナーレが自分の上司の隣に行くためにはどんな非道なことでもとかなんとか喋っている内容を聞きながら悩んで…悩んで…悩み続けた結果
「そんな回りくどいことしないで当たって砕けろの精神で上司からの仕事一生懸命やって地位あげるんだよバカタレェ！」
「!!?」
　はっちゃけた…それはもう壮大に、全力で、友達の事を思った結果である、仕方ないよね？（お目目ぐるぐる）
「そうやってねちねちねちねち考えてんなら上司に目をつけられるくらい仕事したり助手したりして興味を自分にひかせるんだぁよぉ！したらばそのうち上司が『君、いいね！』って言われるからぁ！」
「え？え？え？」
「それじゃそろそろ日が沈むから教会前に送る！気を付けてな！」
「それ気を付ける要素なくない!?というか正気に戻ってくれないかし

ら会話が成立しない!?」
レイナーレが焦りながら俺にそう言ってきた…俺は、正気に、戻った!
でも日の傾き具合からだいぶ時間が遅い事が分かったのでレイナーレを教会に送ってから俺も家に帰った
…後家に帰ったら親に少し怒られました、流石に夜8時までは駄目だったみたいです…部活やってないから言い訳も出来なかったので大人しく怒られました、丸

ーーーーーーーーーーーーーーーー

「ただいまー」
正臣さん「おか…えり…牙刻君」
クレーリアさん「お帰…りなさ…い…」
「あ、お帰りなさい牙刻…今日はお鍋よ!」
「その前に状況を説明して? いや結構まじで」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

「はぁ…昨日はいろいろあったな…本当に」
次の日、俺はいつも通りの通学路で学校へ向かいながら昨日のことを思い出していた
イッセーがレイナーレにころころされたりレイナーレがイッセーを殺した理由が上司の隣に…というか憧れたからとかその辺の理由

だったり正臣さんとクレーリアさんが親父にしごかれたりとか鍋が明らかに麻婆だったりとかクレーリアさんのお兄さんの手伝いをしていた眷属の人たちが上司…皆が言うには老害どもの愚痴を言ったり…

後は時々連絡を取り合う紫藤さんに現状報告したりとか…なんか教会の仲間が濃くて困ってるとか知り合いの聖女ちゃんが悪魔癒しちゃって異動することになってそっちに来るとか薬（胃薬）の注文とか話ながら世間話をしていた

紫藤さんは正臣さんとクレーリアさんの調子も聞いてくるので『いつも通りブラックコーヒーが欲しいほど甘いです、最近だと機械全般を修理出来るようになってます』と伝えたら驚かれた…なんで？家にいる人は全員時計修理できるんだしそれくらい当たり前じゃないの!?（洗脳）

その後ソウゴさんからタライを落とされました、痛いです

「おーい！牙刻ー！」

「あ、間抜けだ」

「酷くねぇか!?」

そんなことを考えながら歩いていると、先日死んだ筈のイッセーが眠そうに走ってきた

イッセーは俺の発言に怒ってるけど事実ですよね？油断するなって言ったそばから油断して死んだだし

「体調はどうだ？俺はお前がどうなったか知らないからな」

「ん？う～ん…なんかいつもより体が怠くて朝に弱くなってる気がする、日差しがいつもより辛く感じるしな…あ！でも身体能力は上がった気がするな！」

「ふーん…朝がキツイと…」

どうやら転生悪魔になると朝に弱くなったり日差しに弱くなったりしてしまうらしい、この具合だと教会系の奴もアウトだろう

悪魔界でも大物の妹さんを居候させてるのになんでこんなに知らないのかって？長いお話、嫌いなの

あとイッセーは悪魔とかは知らないが俺の親とかが異次元過ぎる

のでレイナーレが堕天使だと知ってもあんまり驚かなかったらしい
…本当にあのときはすまんかったイッセーよ、うちの親父が見せた某ＯＴＯＮＡのＨＡＫＫＥＩを見たせいでイッセーのなかのＪＯＵＳＩＫＩが壊れたんだ…
だからイッセー、そんな嬉しそうに空を蹴って飛ばないでくれ、頼むから常識的なお前に戻ってくれ！
俺は心の中で謝りながら学校に向かった
学校で少しトラブル（主にイッセーの彼女の件）はあったもののその日の放課後まで飛ぶ

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「はぁ…まさか皆に夕麻ちゃんの記憶がないなんて…」
「ま、しゃぁねぇだろ…堕天使なんだからそのくらいお茶の子さいさいなんだろうし」
「というかなんで女子たちは悲鳴あげてたんだ…？俺と牙刻がどうとか言ってた気がするんだが…」
「気にするな、ただの腐汚ー素（フォース）の妖精だから」
「なんかイントネーション可笑しくなかったか？」
ただいま放課後でその辺をぶらぶらしてます、学校でイッセーが「俺に彼女がいたらどう思う？」と遠回しに確認したところ男子からは恨み事、女子からは悲鳴（主に腐汚ー素使いの女子）が鳴り響いたのでその日の学校は少し辛かった（主に鼓膜が）
そんな事を話ながら歩いていると、俺は何者かの殺気を感じた…しかもご丁寧に真っ正面から光の槍と共にだ
俺はそのまま歩き続けて、イッセーは飛んできた光の槍を回避した
「あ、そっちいったぞ」
「危ねってあちち!?」
「ほう？悪魔が人間といるので私はてっきり後ろから襲おうとしているのかと思ったらどうやら違かったようだな」

俺はちらっと横にいる光の槍を避けたイッセーを見ながら、前方で黒い翼をはためかせながら空を飛んでいる男を見た
その時イッセーの手の甲に何かの紋章が浮かび上がったのを男は見逃さなかったらしく、少し顔が渋くなった
「その紋章…成る程、レイナーレが仕留めたと言っていたがそうか…悪魔に転生したのか」
「一応確認するがアイツお前の上司だろ？呼び捨てでいいのか？」
「カシラと呼んだら『なんでそこはアネゴじゃないの!?』と驚かれてしまったよ」
「いやそれは正常だろ!?てか牙刻はなんで初対面の奴と話せんだよ!?」
イッセーは驚いてたがこれはある意味事故だぞ？
それに相手は攻撃はしてきたもののそれはイッセーがはぐれに見えたってだけだからきっと大丈夫だと判断したから話してんだ察してくれ
俺はイッセーに向かって一応注意しておいた
「イッセー、覚えておけ…正直言って今のお前の現状ははぐれに近いから狩られても仕方ないぞ？」
「は、はぐれ…？」
「…ふむ？あぁつまりはそういうことだったのか。そういうことだったらすまなかったな悪魔少年に私の上司の友人よ…それでは面倒になる前に私は失礼する」
それだけいって男は帰っていった…いや本当に何しに来たんだあれ
少し唖然としながらも寝っ転がっていたイッセーを起こしていると、後ろから声を掛けられた
「あら、結界の反応がして来てみればあなただったのね兵藤君…それにあなたは確か…」
「逢魔牙刻ですよ、グレモリー先輩？」
後ろを振り返ると赤い髪を風にふかせながら歩いてくる駒王高校の制服を着た駒王高校で有名人で女子からも男子からも人気が高い

三年生のリアス・グレモリー先輩がいた
「う、うぇ!?なんであのリアス・グレモリー先輩がここに!?」
「いやここに来たってことはさっきのあれ関係だと思うぞ?…あー色々聞きたいけど明日でいいっすかグレモリー先輩」
「そうね、なら明日あなた達を迎えに行くから今日は帰宅しなさい」
俺達にグレモリー先輩はそう言ってきたので『お言葉に甘えます』とだけいってイッセーを家まで送ってからクジゴジ堂に帰ることにした

イッセーを家に送った帰り道…
俺は一人でイフライドウォッチとジオウライドウォッチを両手に持って家に向かって歩いていた
不思議と顔に違和感を覚えると、俺は笑っていることに気付いた
「…ふふは、さぁてと…俺はどうこの狂った道を歩こうかな…」
俺はそう呟きながら前方に立っていた不審者に顔を向ける
不審者は下種らしい笑みを浮かべながら手に持っていたアナザーディケイドのウォッチを起動させオーロラに消えていった
「…やはり異物か、どうやらイッセーには面白い才能でもあるようだな…なぁ楽しませてくれよ?異物共…戦いの日まで、せいぜい己を磨け」
『ぐげげ!お前があの男が言ってた上手いやつかグボッ!?』
「ーーー選べ、そして掴め、最高の可能性を目指すため…そして掲げよ、己自身の可能性を!」
後ろで塵に還った何かが何を言っていたのか分からないがそのまま歩き続ける
そして『高台に立ちながら駒王町を見渡していた』
俺はイフライドウォッチを起動させウォッチを持った手を横に振るう
すると俺を起点に複数の線が伸びていき枝分かれするように分裂

し至るところにある別々の時を刻む時計に結び付く

「祝え！今ここに可能性のイフが告げる数々の戦いの始まりにして原点、悪魔兵藤一誠の誕生を！この大樹（物語）の小さな芽の芽吹きを！異物により本来の歴史が捻れ狂った大樹の行く末を！そして戦え！自分が欲しい可能性のために！抗え！叫べ！立ち上がれ！

己の可能性を輝かせるのだ！」

その日、町には大きな古時計の鐘の音が響き渡った…

ある人物は笑みを浮かべ、ある人物は空を見上げ、ある人物は己の技を磨き、ある人物は街灯の上で飯を喰らう

仮面ライダーイフ、逢魔牙刻の捻れに捻れまくった物語が始まりを告げた

俺の力

先日の堕天使の襲撃…？のような何かがあった後日
俺は学校の授業を受けながら迷っていた…言わずもがな自分についてである
実はあの時やらかしてしまったのだ、普通の人間ならば慌てふためきイッセーのような反応をする…と思うのだが、俺の反応は冷静だった…というかいつでも戦える気持ちだったためにグレモリー先輩にただ者ではないと思われ、何か力があるかもと疑われるかもしれない事だ
後は…悪魔に転生しないかと誘われることだろうか？
恐らくだが、グレモリー先輩は俺のことも悪魔にすると思われるのだ…無意味だけど

そうこうしているうちに授業は終わり、時間は放課後になった
グレモリー先輩から迎えは送ると言われたのでとりあえずは机で待機することにした…
…のだが来ないのである、迎えが
あれから大体三十分は経つのだが誰も訪ねて来ないのだ
…俺はだんだんとムカついてきたので、気分転換で屋上に行く事にした
机から立ち上がり鞄を持って屋上に向かう…俺は思考をグレモリーから異物に変える

あの時、確かに不審者が持っていたのはアナザーディケイドのウォッチだ。こっちはライドウォッチを使えば未来が見えるとはいえあまりそういうつまらないことはしたくないので、自分で考察することにした
「まずは敵戦力か…」
俺からすれば、奴は他のアナザーライダーのウォッチを持っている

だろうな…ご丁寧に全員召喚して
　次にどんなウォッチが来るかだが…主人公ライダーだけだと良いがな、ファイナルフォーム状態のアナザーは出来るだけ相手にはしたくないな
「そしてあちら側の知識量もだな…と、もうついたのかって鍵掛かってる…仕方ないからピッキング…嫌でも…う～ん」
　相手は恐らくだが俺と同じ転生者だ、しかもライダーを知っている、が備考に付くほどの
　もしそうだった場合は…ジオウに変身するか、イフに変身するか、”アレ”を使うか、だな…後はあの神社の時みたく他のライダーに変身するか
　なんとかいけるかと思ってやった結果上手くいったけど、”アレ”は一歩間違えたら宇宙警察が現れるくらいのアレだしなぁ…多分『俺は海賊とかじゃないです！』って言っても無駄だろうし…
「そこで何をしているのかな、逢魔牙刻君？」
「いやー実は屋上に入れなくてってゲェー！会長!?」
　そんな事を考えていると、肩に突然人の手が置かれた
　振り返ると笑顔で額に青筋を立てている駒王高校生徒会会長の支取蒼那が覇王の気配を放ちながら立っていた
「いや、これはですねぇ！…屋上でバァ→イオ←リンの練習でもとーー」
「…なら丁度いいわね、私に聞かせてくれない？」
　咄嗟に思い付いた言い訳を言っていたら、会長はため息をつきながらそう言いい屋上の鍵を開けて、彼女は風が吹く屋上へと繰り出していった
　…不覚にも、少し彼女に見惚れてしまった
　スカートを風が揺らし、髪を少し押さえながら優雅に歩くお嬢様みたいだったからな…仕方ないだろう？うん仕方ない（自己暗示）
「あら？エスコートもないの？」
「はぁ…席は此方ですよ、お嬢様？」
　俺は観念して彼女を近くのベンチに座らせた。もちろん鞄から紅

茶入りの水筒と紙コップを出すのも忘れない
温かい紅茶を入れたコップを渡して、俺は『鞄の中に入ったバイオリンのケースを取り出した』
中からバイオリンを取り出して調子を確認している間に少し話をすることにした
「てか、真面目な生徒会長さんがこんなところで道草食ってていいんですか？」
「今日は生徒会の仕事がすぐに終わって、少し屋上で風でも浴びようと思ったらあなたが居たんです”牙狼”君♪」
「貴女までそれを言いますか…この慌てん坊のお嬢様は」
「ふふふ…あの時、逢魔君が来たのは本当に助かりました、だからこんな軽口叩けるんですよ」
実は、俺が生徒会長と知り合ったのはとある面倒事がきっかけなのだ
その事件に巻き込まれた駒王の生徒を会長が助けようとして突入したら逆にピンチになってしまい、その時に丁度買い物帰りの俺が助けに入ってやった結果…
まず事件の犯人である男は男としての武器を潰した
その仲間は俺の優しい説得（脅迫）で投降したので結構すぐに終わった
通りすがっただけなので直ぐに帰ったら、次の日の学校で会長に捕まった、そんでお礼を言われた
なんでも、会長宛に『一人で来なければ駒王の生徒を…』と送られてきたので一人で解決しようとしたらしい
因みにその時の俺は高一だったので、変態二人組に後で捕まりかけた…まぁ返り討ちにしたけど
まぁ色々ありながらもそんなこんなで今も時々会ったりしている…のだが
「……相変わらず疲れるとテンションが可笑しくなるのは変わらないですね」
「逢魔君に助けてもらった頃から…一年生の時から言っているのだけ

ど二人きりのときは名前で呼んで良いんですよ」
「人の話聞いてます？おーい？」
「にしてもまだかな？早く逢魔君のバイオリン聴いてみたいのだけど…」
こんの人は…俺はそう心のなかで呆れた
なんとこの生徒会長様、普段はキリッ！としているのだが疲れが溜まりすぎたり徹夜したりするとだんだん話を聞かなくなるのだ、しかも口調も変になる…俺限定で
とても信頼されて嬉しいような、あの生徒会長の裏を見てしまって驚愕したような、複雑な気持ちである
「んじゃそろそろ弾くとしますか…選曲は俺がやっていいっすか？」
「それじゃぁお願い」
俺はバイオリンを構えて弾き始める…選曲はサイレントな丘で有名なあれである

～～～～♪

「…ねぇ逢魔君、最近変な事とかに巻き込まれてない？」
「…さぁてね、最近は知り合いの知り合いに会ったことくらいしか変わったことはないです」
本当は弾くことに集中した方が良いのだが俺にはそんなこと簡単に出来るので会長の問いに答える
会長は俺の答えに『そう』とだけ答えて音楽を聴いていた…が、途中で眠くなってきたようでフラフラしていた
「しばらくしたら起こしますんで寝て良いですよ」
「…それなら、お言葉に甘え…ます」
会長は壁にもたれ掛かって眠り始めたが、弾くのは止めずに続けた

しばらくはループさせていたが、何かの気配を後ろに感じて演奏を止めた
…なんというか表現しにくい感覚を感じた、言ってみれば”透明な何かがいる”って感じだな
演奏が止まった瞬間後ろから何かが飛んできたのでバイオリンで跳ね返した…それの影響でバイオリンが壊れた事に少し残念に思えたけど気にしない
それと同時に振り替えるとあのときの不審者がいた
「よぉご同類さん…そこで寝ている悪魔ソーナ・シトリーを渡して貰いたいのだが？」
不審者はニタニタ笑いながら会長に目を向けている
……２５過ぎのオッサンが言うとやべぇな、あれ…
てかソーナ・シトリー？支取蒼那と勘違い…いや、悪魔？あぁそういうことね？
「断る、と言ったら？」
「実力行使だぁ！」『ディケイド…』
勿論断った、そしたら案の定アナザーライダーになった
少なくともまだ実力が分からないためどう判断すればよいか…
少なくともこいつはバカなのだろうな、本来なら戦う必要なんてなくともアナザーディケイドの力で会長を簡単に拐えるってのにわざわざ戦うのだから
「なるほど、それなら俺もそれ相応の実力であんたと戦おう」『ジクウドライバー！』『ジオウ！』
まずは力量を測るためにジオウに変身することにした
イフの能力をそんな簡単に見せては駄目だし後々が面倒
”アレ”はド派手に行きたい時にでもやるとしよう
残念だが変身シーンは丸々カットだ
「フゥー・ハァー・ハー！」

「……チッ、アナザーディケイドの力は伊達じゃないな…あんた結構強いな」
俺はアナザー（以降不審者はアナザーとする）に蹴って殴って切って撃つがあんまり効いてはいないようで、アナザーはオーロラを使った攻撃や他のアナザーライダーの力を使ってくる
俺はアナザーの攻撃をいなしたり防いだり反撃したりしているが、決定的な攻撃がなかなかでない
「ふはははは!!やはり素晴らしい！俺は最強だぁ！」
「おっとすまねぇな訂正しよう、お前”が持っているアナザーライダーの力は”強いな」『ディディディディケイド！』
「…なぁにぃ？」
『ライダーターイム…カメーンライダー！ジオウ…アーマーターイム！カメンライド（ワーオ！）ディケイド！ディケイド！ディーケーイードー!!』
「さぁて、反撃開始だ」『ライドヘイセイバー！』
正直に言おう…アイツは弱い！
いや別になめぷではなく本当に弱い！困る！
なんというかあのソウゴさんですら『嘘、アナザーディケイド弱すぎ!?』って叫んでたくらいだよ!?
あれだよ、完全にこれ逆天道さんパターンだよ、装着者が弱すぎるあれだよ!!ザビーパターンだよ!!
二人の逢様を相手にするより楽勝なんだけど!?
『…』
「ん？……成る程ね、任せるよ」
『…』
さて、ライドヘイセイバーが自信満々なのでガンガン使っていきま
『待って待って待って牙刻!?』
どうしたんですか、ソウゴさん？なんかじいちゃんもため息ついてるけど…
俺は頭の中で逢様達と（誤字にあらず）会話をしながらアナザーにライドヘイセイバーを構えた

『…牙刻よ、お前は今ライドヘイセイバーと会話をしたのか？』
『え？まぁそうですけど…』
『俺そんなの知らないんだけど!?初耳なんだけど!?また門矢士がなんかやったの!?』
「は！そのディケイドウォッチは不良品だ、たかが半分の力で俺を倒そうなど無意味ーー」
「不良品？半分？それは違うぞ」『ヘイ！クウガ、デュアルタイムブレーク！』
　ライドヘイセイバーをアナザーに向かって振ると、古代文字の紋章が浮かび上がり、紋章がアナザーに向かっていきアナザーは吹き飛ばされていた
　クウガはクウガの封印のエネルギーを飛ばせて威力もあるからな、それに他のフォームの力も使えるから便利だ
「グハ!?な、何故だぁ!!何故あちらの攻撃が…ならば！ふん！」
「この力は門矢さんの物だ…一部だけどな、んで今使っているのは本人に許可を得たコピー品だ、しかも一部じゃないしただのコピー品ではないからな」『ヘイ！アギト、デュアルタイムブレーク！』
　そうなのだ、本来のディケイドライドウォッチはディケイドの半分の力を宿していたがこのウォッチは何故かコピー品なのに、本当にディケイドの力が宿っているのだ
　…まぁコピー品とは言えないか、門矢士にはｎｅｗの奴があったから前の奴を貰って俺が手を加えた品なんだけどね、ちゃんとクウガからビルドまで対応するから特には気にしてない
　アナザーが怒りながらオーロラを経由して死角から攻撃してくるが”感覚”で察知してライドヘイセイバーでカウンターをする
「ーーそこ」
「何ぃ!?」
　カウンターをするためにライドヘイセイバーを振ると、ライドヘイセイバーは炎に包まれ、刀身が赤い紅蓮の炎の様に伸びてアナザーを切り裂く
　これはアギトのフレイムフォーム、”超越感覚の赤”とフレイムセ

イバーの力である
他にもオルタリングの自然回復というか再生能力とか”超越肉体”と”超越精神”も使える…
あれ、これ本当にライドヘイセイバーなの？まぁ本物とアーマータイム状態よりは能力は劣るけど…んん？まぁいいか
「がぁ!?く、クソォ!!こ、この俺がぁ!!」『フィニッシュターイム！』
「…二人でギブアップか、まぁ運動にはなったかな？」『ヘイ！ヘイ！平成ライダーズ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘヘヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！』
俺がライドヘイセイバーの針を全開にして技を出して決めようとしたとき…

「う…？…逢魔…君？」

なんと会長が起きてしまったのだ…面倒なタイミングで、ほんの少しその事実に気を取られてしまった所をアナザーが感づいた
「おりょ？起きちゃいました？」
「!!今だぁ！」
「いや逃がさん」『ディディディディケイド！アルティメットタイムブレーク！』
俺は直ぐ様アナザーに向かってアルティメットタイムブレークを放つ、すると二十枚のカードの様なものに『ヘイセイ』と書かれたエネルギーの斬撃がアナザーを切り裂こうとするが、すんでのところでオーロラに入られて逃げられてしまった

俺は変身を解いて頭を掻いた
会長はどうやら完全に目を覚ましたらしくすぐに俺に迫ってきた。
やべぇよやべぇよ

「…あらら～、逃がしちまった」
「逢魔君…今の姿、それにあの剣って!!」
「おおっと、みーなーまーで言わない！時間が時間だから軽く説明する」
とにかく、時間を少し掛けすぎたようで日が結構傾いていて夕方になっていた
…マヨラーの神とバイクの神の二柱に俺は祈った…俺に言い訳の力をくだしあ
とりあえず説明は本当に大雑把で的確に、そして簡単に印象的な事を嘘と真実を交えて教える
内容はこんな感じだ
「俺はまぁ…さっきのやつを追っているんですよ、理由は奴が持っている能力でそれは”とある戦士達の力”を使える」
「とある戦士達…？」
「まぁ細かいこともあるけどそれは飛ばして…そんで奴はその力を私利私欲のために使っている…ここまで言えば俺が言いたいことは分かる？」
「…逢魔君はその力をどうにかするために？」
「みたいなもんです、あれは本来あんなことに使っちゃいけない…（例えあれがアナザーだとしてもあの力はライダーの力なんだから…）まぁこれは俺の問題だから別に会長は気にしないでくれよ？」
「え、なぜーー」
「おっと、すまんがそろそろ失礼しますよ！ではまた明日”蒼那先輩”！」
とまぁそこまで言ったらすぐに俺は帰った、ダッシュでね
なぜかって？面倒な会長ラブボーイに難癖つけられるからな、これにはさっさと帰るが正解だな…オーロラだと見られたときヤバいから歩いてだけどな
俺は学校を走って出た

「…帰ってしまいましたか」
ソーナは、屋上から校門の様子を見ていた
そこには鞄を背負いながら走る逢魔牙刻が見えた
ソーナは先ほどの光景を思い出していた…

あの時、確かに牙刻が持っていたのは二天龍を軽々と倒しさらには自分の姉を助けてくれたらしい仮面ライダーイフが使っていた剣に酷似していた
姉はよく自分にそのときの話をしていたので(その時のとても分かりやすい紙芝居的なのも交えて)あれが例の人が持っていた剣だとすぐにわかった…特徴的で細かな説明をされたので分からされたとも言えるが
「あの表情…まだなにか隠していますね?」
ソーナは牙刻がまだ何かを隠している事と、最近駒王町で起こっている事件が何か繋がっているのではないかと考えた
ソーナが疲れている理由、それは駒王町の住民が行方不明になっている事件が関係していた
駒王町の管理は基本的にはリアス・グレモリーと少し分担しているのだが、この事件に関してはソーナもリアスも頭を痛めていたのである
そしてそんな謎の事件の手掛かりが見つかったとしたら、それに頭を抱えている者がどう行動するかは目に見えていた

「これは恐らく私だけで何とかしないといけませんね…大人数だと逆に危険だと考えると…追跡、でしょうか」
そう一人でどうするかを考えながらソーナは学校の中へと戻っていった…少しだけ嬉しそうな雰囲気もだしながら

ソーナはこの時はまだ、彼が相手をしている存在がどのようなものかを…
そして牙刻は何となく察していた、彼女は自分を監視かなにかする気であろうと…それが彼女自身だとは知りもしなかったが
しかし同時に予期せぬ事態が起こる事は、ソーナもアナザーも…ましてや牙刻ですら看破できなかった…

ーーーー日は沈み月が昇る…それは長く短い暗黒の時間の始まり
ーーーー月明かりが照らす中、紫色の鎧と兜を着た戦士が空を見上げていた
『……戦え、俺と戦え強者よ…』
ーーーーそう呟きながら戦士は闇の中へと消えていった…

今回の裏話

「実はねソーナ、先日悪魔にした兵藤君とその友達の逢魔牙刻君が堕天使と思わしき何かと接触したかもしれないの」

「…それがどうしたんですか、リアス」

「兵藤君と牙刻君をオカルト部に入れるわ」

「確か兵藤君はリアスのポーンで…しかも8個使ったんでしたっけ、だけどなんで逢魔君も？」

「あの時、牙刻君だけは警戒を怠っていなかったからよ…とりあえず観察にってことでーー」

「なら私がするわ、入部の話も私がしておきますから」

「…えーと、ソーナ？どうしてそんな顔をーー」

「”私が”観察します、リアスは町の管理とかで人員を割けないでしょう？だから”私が”それを代わります」

「え、いや別にーー」

「良　い　で　す　ね　？」

「あ、はい」

こんなことがあったのでリアスは牙刻に迎えを出さなかったというか出せなかったのでした、丸

戦いの狼煙

あの襲撃から数日後の放課後、俺は町を歩いていた
実はあの日以来何処からか誰かに見られている感じがし始めた、恐らくであるが会長に繋がりがある悪魔が俺の動向を気にし始めたのだと思う
だがもっと驚いたのは会長が俺に会いに来た理由がオカルト部の入部だとは思わなかった、気付いたのは翌日に机の上に手紙と入部届けが置いてあったからである
詳しい話などはオカルト部部長のリアス・グレモリー先輩に聞けとの事だったのだが生憎と連続で放課後に時間がなかった
そう言うわけで、俺はまだオカルト部に行ったことがありません！多分会長が何とかするとか言って黙らせてるからあとは俺が来るのを待つだけだと思うけどしばらく部室には行けないので凄く申し訳ないのだ

「はぁ…どうしたもんか」
「ん？」
「およ？」
「ほえ？」
俺がその事でため息を吐くと、隣で同じくため息を吐いている綺麗なシスターを連れたなんというかエクソシストっぽい服を着た少年がいた
俺が疑問の声をあげると少年は軽い口調で、シスターの方は間抜けそうな声を出して固まっていた
変わったカップルかな…と思っていたが、その直後に微かな血の匂いが鼻に届いた

どうやら血の匂いは少年から漂っている事を確信して、少し面倒事の香りもするが気にしなくて良いであろう”どうせ裏の人間だろうしちょうどいいからな”
「…あー、もしかしてこの家の人に用でもあったか？」
俺は二人が立っている前にある家を指差しながら言った
恐らく彼らもこの住人の”何か”を見つけたとかそこら辺であろう
俺がそう聞くと少年の方が軽い口調で返事を返してきた
「そんなところって感じだよ、なぁアーシアちゃん」
「えと、は、はいそんなところって感じです！」
なんかシスターっぽい子がなんか可愛いというか微笑ましい、てかそんなところって感じってどういう感じなんだ（哲学）
しかしまぁそんな所を見るに女の子の方は明らかに戦闘向きでない、ということは結界とかそこら辺の役割なのだろう
俺は”そういう裏の人間”だと思わせる為に話をすることにした、これで少年が反応したらつまりそう言うことなんだろうな
「なるほどね、実は俺もこの家の人に用があってな…」
「そうなんですか？一体用事って」
「いやアーシアちゃん、そんなこと簡単に言ってはーー」
「んー？なに簡単な話だ、ちょっと取り立ーーげふんげふん集金をしに来ただけさ☆」
「言ったぁぁぁぁ!?簡単に内容言ったし明らかに取り立て屋だぁぁぁぁぁ!!?」
秘技！N式　理不尽集金！（シンフォギア並感）
これには少年の鋭いツッコミが入ってきた、君は良いツッコミを持っているな！良いツッコミ枠じゃないか！
アーシアと呼ばれていた子は首を傾げていたけど、俺はそんなことは気にせず家に侵入していく…勿論スニーキングミッションです
「お、開いてんじゃーん（小声）」
「ちょぉぉぉぉい!!?えーと、とにかく！アーシアちゃんは二階に行って結界頼むよ！（小声）」

「えぇ!?と、とりあえず分かりました…」
特に現状を理解していないのに自分の仕事をこなそうとするとは
…この子の将来が少し心配です

――――――――――――――――――

凄く申し訳なさそうに二階へ上がっていく女の子を確認してから、
少年と一緒に住民がいると思われるリビング扉の前に並んだ
「…取り立て屋にしちゃ雰囲気が他とはダンチじゃないですか～?」
「そういうお前は鉄臭いぞ、ちゃんと消しとけよ…んで?そちらさんの狙い、てかお前の狙いは?」
俺はお返しの様に少年に聞いた、少し悩んでいたが恐らく犯罪でも犯したのだろうここの住民は
「あー……やっこさんは悪魔と何回も会ってるから殺す!ってのは建前でアーシアに言ったことも建前の建前で本当はやっこさん、他県で集団殺人やらかしたもんなんすよ」
「ふぅ、ずいぶんとクレイジーなやつ―――」
―――ぎやぁぁぁぁぁぁぁ――――!!!!!?
「じゃねぇかッ!!」
「しょぉいッ!!」
そこまで話しているとリビングから男の叫び声が聞こえてきた
俺と少年は扉を蹴破る様に扉を開けた
「大量殺人犯…貴様に力を与えてやる!そしてあの女を回収しろ!」
『ブレイドォ…』
中には、ブレイドのアナザーウォッチを男に突き刺すアナザーと苦しそうに心臓のある所を押さえている男がいた
アナザーは俺らを見るとにやっと笑いオーロラの中に消えていった…苦しむ男を置き去りにして
「ぐぅ…ッ」
「…なぁ、お前の名前は?」
「フリードっていうんすよ、旦那は?」

「俺は逢魔牙刻だ…一応高校生」
苦しむ男を見ながら冷静に自己紹介を始めた俺たちは、冷や汗をかきながらこの後の展開を考察していた
「じゃあフリード…この後の展開どうなると思う？」
「そりゃもちろん定番の…」
その時、男が叫ぶ様な大声をあげて黒い何かを纏い始めた
そしてそれが終わると、そこにいたのはトランプのスペードを模したような鎧を着たなにかが立っていた
『ふへぃぁぁぁ…ガァ！』『ブレイドォ…』
「化け物化っしょー!?」
「だよなぁぁぁ!?」
化け物になった男が狭い部屋だっていうのに突撃してきた
俺らは二手に別れてお互いの得物を取り出した
フリードは光の剣と銃を、俺はコルト・パイソンと警棒を構えて戦闘体制をとった
『グルル…』
「これは…ヤバそうな気配がプーンプンしますぜ逢魔の旦那ァ!!!」
「おいおいおい！何だってこんなことになるんッ避けろォ！」
『ガァァァァ!!!』

俺らが話をしていると男の体に雷が発生し始めたのを見たのですぐに伏せた
直後頭の上を落雷が通ったような衝撃と光が通り過ぎていった
どうしたもんかとしゃがみながら考えていると外から『うぉぉぉ!!?何事だぁぁぁ!!?』という聞き覚えがある声が聞こえてきた
「イッセーか？これは丁度…ってどこ行きやがったあいつ！」
「……まさかアイツ、二階にいるアーシアを!?」
俺達がすぐに立ち上がった瞬間、上からガラスを割る音と悲鳴が聞こえた
更に外からイッセーが女の子の名前を呼んでいる声も聞こえた

「急ぐぞ！」
「あいあいさー!!」
　急いで外に出ると、そこには悔しそうに空を見上げるボロボロのイッセーが座っていた…腕には見覚えのない籠手が着いているが気にしないでおこう
「イッセー！無事か！」
「牙刻か…？アーシアが…化け物に…連れていかれちまった…」
「どっちに逃げたか分かるかな悪魔君!?」
　イッセーは震えながら指を指した…指の先には確か古い教会、というかレイナーレの拠点がある記憶があった
　俺とフリードはそれだけ聞いて走り出した

…後ろからなんか聞き覚えがある声が聞こえてきたが無視だ無視

ーーー

『ーーー戦え』

「ッ!?」

二人で軽口叩きながら走っていたが、その声が聞こえた瞬間体が震えた。お互いスライディングするように立ち止まって背中合わせになり警戒体制をとるが、声の正体は真っ正面から歩いてきていた…確実に敵意丸出しで、というのがなければ嬉しかったのになぁ!!

『戦え、強者よ』

歩いてきたそいつは紫色の鎧を身に纏い、龍の顔を模した鍔が付いている剣と鱗の様な盾を持っていた

フリードに『知り合い?』と目で訴えると全力で冷や汗をかきながら首をブンブン振っていた

奴はある程度俺達に近付くと立ち止まり剣を掲げた…直後に強力なエネルギーが剣に溜まっていくのを感じた俺はすぐさま横に飛んだ

フリードも遅れて飛ぶが、奴はこれは好機と言わんばかりに剣を振り下ろし斬撃をフリードに飛ばした

「まずッ!?ガッ!?」

「フリードォ!」

『ーー戦え』

斬撃をなんとか防ごうとしたがフリードは直撃してしまい血を吐き出しながら壁に叩き付けられて、首がカクッとなっているため気絶したのだろう

吹き飛ばされたフリードを見ながら奴を確認しようとすると、いつの間にか目の前に剣を構えて走ってきていた

「マジか…!!」

俺は奴が剣を振るタイミングで剣を警棒で受け流したりしながら

コルト・パイソンで兜や鎧の胸部分を撃つ…が傷ひとつつかないため攻撃の殆んどをなんとか交わしている

俺は警棒で攻撃を捌いていくが変身だけはしなかった

なぜなら変身した場合様々な面倒事が舞い込んでくるからだ…言ってみれば俺は変身することを拒んでいるといっても過言ではない

……変身したら消える物と現れる物の差が有りすぎるから嫌だってのもある、一応補足しておくが俺は元々一般ピーポーだからな？普通の高校生を過ごしたいんや俺も

しばらく攻防が続いていると奴は立ち止まり、剣で俺を指しながら怒鳴った

『…なぜだ、何故本気で戦わない…！…戦士として恥ずかしくないのか…！』

「生憎とだが俺は突然来るやつとは余り戦わない主義なんだよ…場所指定してから来な!!」

俺はそう言いながら銃を構えると、奴は手を口元に置きなにかを考える素振りをしてか、奴は剣を下ろした

『…ふむ……ならば次の夕暮れ、町の教会の地下儀式場で会おう…あそこにはそこの白髪の仲間達がいる』

「明日の夕方…？それに白髪の仲間達ってのは」

『安心しろ、奴らは無事だ…奴らは戦いの景品としようではないか…まぁあの男が変なことをしない事は祈っていろ』

奴は後ろを向いて歩き出した…俺は奴の後ろ姿を見ながら思考していた。

奴はアナザーの仲間なのか？アナザーの目的はなんだ？奴はなぜ無事だと言えるんだ？仲間達とはレイナーレのことなのか？

様々な考察が頭の中で出来ていた…けどそんな考えは奴の去り際

にはなったたった一言でごちゃごちゃだった頭の中の事全てが吹き飛んだ

『お前の力を見せてみろ』

気づくと、奴はいなくなっていて俺はその場に立ち尽くしていた
「……ハッ！くんだらねぇな…俺らしくない」
俺は失笑しながら携帯で学校に明日は休む事を、家には友達の家に泊まるという連絡を入れてから気絶したフリードの肩を持って近くの廃墟に向かった
「面白い…いや面白い面白い…俺は何をしていたのかと先程の自分を消してしまいたい気分になってしまうな…」
フリードを引きづりながら俺は愚痴っていた
当たり前である俺は敵を嘗めていたためこんな事態になってしまったのだ、これを滑稽と言わずになんと呼ぶ？
普通の高校生活を過ごしたいと言って怠けていたなんて知られたら恥ずかしくて眠れもしない
今俺はとてもキマって来ている、すぐにでも変身して向かいたい所だが約束は約束だ…しかしそうなってしまうと今という時間が勿体無いな…早く明日の夕方になってほしい所だ
てかなんで俺はコルト・パイソンと警棒持ってんだ？普通に剣とか出せば良かったのに…俺も時々何をしたいのか分からなくなるから困るな
「仕方がない…では『明日の夕方までの過程を消し飛ばそう』ではない

か」

そう呟いた瞬間、世界は『少しの間消し飛んだ』

ーーー

そこには包帯を巻いたイッセーと少し警戒しながらフリードを見ている小猫と殺気駄々漏れでフリードを睨み付けてる駒王高校のイケメン代表木場佑斗がいた
「…フリード、お前なんかしたんか？」
「いや、これは俺っちと言うよりかは俺っちの職業に対してだと思われるっしょ」
フリードが言うには教会の戦士と悪魔はあまり中が宜しくない様で、特に教会のはぐれになるとヤバいやつが多いらしくフリードもその枠に入っているらしい
つまりフリードは犯罪者でおｋ
「というか牙狼先輩…なんでオカルト部に来ないんですか？部長が凄く頭を抱えてましたよ」
「そうだぜ牙刻！早くお前がオカルト部に入った時の反応を見たいしな！」
「お時間が合わないんよってかおしゃべりはそこまでだ、そろそろ行くぞ」
俺は全員を入り口の扉から下がらせた
そしてポケットから龍の顔の柄をした青いボトル…ドラゴンフルボトルを取り出してしばらくしゃかしゃかする
「さぁてと…」
しゃかしゃかしていたフルボトルを上に投げて扉に向かって殴る構えをとる
そして落ちてきたフルボトルを右手でキャッチしてそのまま握り締めて拳を後ろに引いて…
「祭りの開始だ」
ーーーー拳を扉に叩き込んだ

ハーフな破壊者

前回のあらすじ…

ーーーーーー祭りの開始

とある古い教会の表口…もともと大きな扉があったそこは砂煙を出しながら木片などが吹き飛んでいき崩れていた…

まるでダイナマイトで爆発したような惨状になっている入り口を何事もなかったように俺は歩いていく

「お邪魔〜っと」

「ちょ!旦那置いてかないで下さいっすよ!!」

「よし、俺達も行くぞ!」

フリードとイッセー達は俺を追いかけるように教会へ入ってきた…小猫と木場が凄い目で見てきている気がするがスルーしておくことにする

しかし不気味だ……なぜなら敵の根城に入ったのに出迎え（襲撃）が来ないのである

本来、悪魔とかそういうのが攻めてきたら迎撃くらいするものだと思ったのだが
頭の中で思考を張り巡らせながら、フリードが言っていた地下室への入り口に向かった…が、そこにあったのは無理矢理こじ開けられた、もしくは削り取られた様な穴があった
それを見てフリードは驚愕、小猫は穴の惨状を見て目を白黒させ木場はその場に残っていた結界の残骸を見ていた
「な、何ですかこれ…」
「結界の残骸…？何かに破られでもしたのかい？」
「……こいつぁ不味いことになったぞ」
俺たちが周りを確認していると、いつの間にかフリードが穴の中へと入っていっていた
「あ、おいアンタ！」
「すんませんがお先に行ってるよ旦那ぁ！」
「このアホ、一人で先走ってんじゃねぇ！」
この状況で一人突っ走る奴がいるとは…まぁ想定内だな。
ここまでは想定内なんだよ、恐らくアナザーはここを襲撃してアーシアとレイナーレとその仲間を人質にして立てこもっているとまで考えられているので大体は分かる

唯一の不安点は鎧の剣士だ
あの鎧の剣士は何をするか分からない…いや分かりはするが繋がりが分からないんだ
恐らくアナザーとは少なからず仲間ではないことは分かる、何故ならばこの教会に入ったとき確かに敵はいなかった…居なかったが”いた痕跡はあった”
そして極めつけはあの穴だ、あの穴にはだいぶよく見なければ分からないが斬撃の痕が微かにあった…木場は気付いていなかったけど

な
　まぁそれ程にまで俺との戦いを楽しみにしてくれてるという事なんだな（!?）

　しばらくフリードを追いかけるように走っていると無駄にデカイ扉があり、フリードは警戒した表情で立ち止まっていた

『ーー来ると思っていたぞ、戦士よ』

　なぜなら、鎧の戦士が門番の様に剣を床に突き刺して堂々と立っていたからだ…俺以外はその場で臨戦態勢をとったが、鎧の戦士は俺だけをその鋭い眼で捉えていた
「…お前ら先行け、これは俺と奴の戦いだ」
「逢魔君…それは厳しいと思うーー」
『ーーーアーシアという少女はいま危険な状況だ、行ってやれ』
「何だと!?」
「牙刻、ここは頼むぞ！」
「おーう行ってらー…ほらお前らもさっさと行ってやれ？」
「…後でスイーツおごってくださいね」
　鎧の戦士はそう言いながら横に退いていき、イッセー達は急いで扉の中へと突撃していった…小猫と木場がこちらを不安そうに見てきたが手をヒラヒラと振って返してやると、そのまま扉の中に入っていった
　ーーー静かに扉が閉まると、その場には俺と鎧の戦士以外誰もいなくなった
　お互い警戒しながら会話をした
「ずいぶんとお優しいじゃねぇか、ええ？」
『なに、ああいう奴ほど強く、そして面白くなるものだ…あんな奴でもちょうど良い足場となるだろう』

「ヘッ！いい性格してるよ、アンタ」
『ふ、あまり褒めるではない…』

俺たちはクックッと笑いながら向かい合うが目は本気だ、鎧の戦士が勝利に飢えている狼の目をしてるのがよく分かるよ…恐らく俺も同じ目をしている
しばらく笑い合うと、鎧の戦士は剣を俺に突き付けた

『さぁ、構えよ』
「良いぜ、その誘いに乗ってやるよ」『ダブル！』

俺はダブルライドウォッチを取り出して起動させた、起動させるとライドウォッチは消えてその代わりに腰には『ロストドライバー』が、ライドウォッチがあった手のひらには『ジョーカー』のガイアメモリが現れた
『ジョーカー！』
「行くぜ……俺…変身ッ！　」
『～～♪』
『ーーほう』

そしてそのまま『ジョーカー』のガイアメモリを起動させてロストドライバーに装着し、完全に差し込まれた事を確認して右手を顔の左側まで口を隠すように持っていき、左手をメモリの刺さったドライバーに置き構える
そのまま勢いよく左手でメモリの刺さったドライバーを右側に倒すと、細かな黒いチップの様なものが足から上に行くように体に纏われていき、紫の波動の様なものが起きるとその場には『仮面ライダージョーカー』が鎧の戦士を見据えていた

『さぁ、お前の罪を……数えろ』
『さてな、そんなもの当の昔に忘れてしまったさ……』

お決まりの台詞を言うとそう返ってきたが、鎧の戦士は少し嬉しそうに俺を見てきた
『では改めて名乗ろうではないか……我の名はガイゾーク…いや、私の名前は浅倉紫（あさくらゆかり）だ』
『…ハッ？…まさか同級生だとは思わなかったぜ？』
『私もだ』
鎧の戦士ガイゾーク…その正体はなんと駒王高校の同じクラスで隣の席の女子、浅倉紫だったのだ！
正直言うとまさにその名の通りだ、学校にはあまり来ないが成績は良く出席日数もちゃんと足りている（ギリギリ）女番長でよく問題ばかりを起こす生徒だ
ちなみに会長の事件と学校に暴走族が攻め込んできたときさりげなく俺と混ざって全員叩きのめしていた
そんな事実に驚きながらも俺は冷静にアイ＝サツをする
『まぁ知っているとは思うが逢魔牙刻だ…それより早く始めようぜ？』
『あぁ、それじゃぁ始めるとしようか』
俺達は目をカッ開き口に笑みを作りながら開戦の言葉を言った
『『祭りの始まりだぁ!!』』

ーーーーそして今…剣と拳が、火花を散らしながら叩き付けられた
ーーーー

「急ぐわよ朱乃、このままだとイッセー達が！」
「あらあら…この気配は上級と同じくらいですわね」
リアスたちは教会の中を駆ける…彼女たちはイッセー達の後ろを追う形で教会の裏口に向かったが、そこにあったのは『堕天使の残骸』だけであった
幾つもの問題がある駒王町だが、こんなことは堕天使でも…しそうな奴はしそうだがまずあり得ない
その事実にリアスは、この教会には悪魔でも天使でも堕天使でもない『何か』がいることに行き着いたため、教会に向かったイッセー達の安全確認を直ぐ様しようとしたが、地下に謎の威圧感を感じとったことによりイッセー達が教会の地下にいると分かったので急いで向かっているのだ
そしてリアス達は威圧感を放つ穴を見つけ出し、中に突き進んでいく…
威圧感が前から溢れ出ているなかを突き進んでいくと、剣を振るう風切り音と堅いものに強い衝撃…というか何かを叩きつけるような音が響いていた
「この音…イッセー達かもしれないわ！」
「にしては気配が強い様な…」

そのまま二人は歩き続けると大きい両扉とーーー
『フン！』
『オラ！』
紫の鎧を着た戦士と黒い人形の何かが戦っていた
それと同時に、今で感じていた威圧感や強い気配は彼らが出していた事が分かった
鎧の戦士…紫が剣を振りかぶってから紫のエネルギーを剣が放ち始めそしてそのまま剣を振り下ろすと黒い人形…牙刻は体をそらすことで相手の懐に入りながら攻撃を避けて拳を叩き込む
『クッ…ならばこれで！』
拳を叩き込まれた衝撃で思い切り後ろに下がり紫は剣を構える

それを見た牙刻は、ベルトから『ジョーカー』を引き抜き右側にある小さなスロットに突き刺して側面を叩く
『さあて、これで終わりだ』『ジョーカー!・マキシマムドライブ!』
紫の剣は紫のエネルギーが、牙刻の右足にも紫のエネルギーが溜められていき周りが静かになる
リアスたちは唖然としながら事の顛末を見た

ーーーそして先に動いたのは紫であった

『龍の力を受けてみよ!・』

ーーー剣を振るい紫の斬撃を繰り出した…その瞬間に牙刻は足を揃えて宙に飛び上がった

『……ライダーキックッ!』

牙刻は紫の斬撃を飛び越えていき、その勢いでライダーキックを紫の胴体にぶつけた
ーーーその瞬間、牙刻が紫に何かを渡したのはリアス達には見えていなかった
『グァッ!?』
『フゥ…』
紫はライダーキックを真っ正面から受けたために、壁に思い切り叩き付けられて地面を這っていた
震えながらも、なんとか膝をつく姿勢になり牙刻を見る
そしてチラッとリアス達を見てから、紫は左手に持っていた『とあるもの』を構えた
『…そろそろ乱入してくるといい、楽しかったぞ…オレはそろそろ失礼する!』

『あ、俺のトランスチームガンっておい待ッ！…もう消えやがった』
紫はとあるもの…トランスチームガンを横に振るうように放つと煙が紫の体を包み込んでいき牙刻が止めようとする頃にはそこから誰もいなくなってしまった
リアス達は怒濤の展開に着いていけずに唖然としていると、変身を解いた牙刻が現れたことに驚き事情を聴くために詰め寄ろうとした…

ーーー

「「部長！」」
「やっと来やがりましたか…ッ！」
「あら…牙…刻じゃない！ずいぶんとピンピンしてるじゃ痛ッ!?」
「そういうお前はボロボロじゃねぇか、交代だ」
　リアス先輩は木場達へと小走りで向かい、俺はフリードとレイナーレをアーシアに押し付けて前に出た
「ふはははは!!貴様では俺は倒せん！」
「かッ！ぐっそぉ!!」『ｂｏｏｓｔ！』
　イッセーはアナザーへと突撃するが、突如現れた白い怪人に攻撃を止められ逆に殴られてしまい俺の傍まで吹き飛ばされてきた
「イッセー」
「ゴホッ！ガッ…あ、あいつずりぃぜ…自分は戦わずに他人に戦わせてやがる！」
『フゥハハハハハァ！何を言うかと思えばそんなことか？そもそもの話だが俺自身が戦わずとも貴様等なんぞすぐに殺せるんだぞ!!』
　アナザーはそう言って笑い白い怪人…『ン・ダグバ・ゼバ』もクスクスと笑っていた
　イッセーはフラフラしながらも立ち上がり明確な闘志を見せてこう言った
「そんな…そんな遊び感覚で人を殺すのか!?アーシアの涙を…人の笑顔を失くして苦しむのを見て笑うのか!?」
『フフフ…ーーーーへェ』
　アナザーは笑い続けるがダグバは笑うのを止めた…そしてその顔に張り付いている笑顔をさらに笑顔にしてイッセーを見ている気がした
　…俺はそんなイッセーを見て、いつも何かのために戦っていた『仮面ライダー達』の姿を一瞬重ねられた
　ならば俺も覚悟を決めなければならない…なぜなら俺も新人だが『仮面ライダー』だ
　俺はイッセーにクウガライドウォッチを投げ渡した
「うぉ!?…これって牙刻がよく持ってた変な時計？」

「ーーーそれは人の笑顔の為に戦い続けた戦士の力だ…使えるか？その覚悟はお前にあるか？」

イッセーに問い掛けるように言うと、返答はなく代わりにサムズアップを返された

俺はそれを見て笑った…ーー冷や汗だらだらでプルプル震えてされても正直困るーーっと思いながらも懐からディケイドライドウォッチを取り出した

「使い方は分かるか？」

「これ持った時になんとなくな…早速行くぜ！」

『クウガ！』

「いや使ってからの話なんだけどな？ま、お前の事は今まで幼なじみしてるから大体分かった…後はアナザーを倒すだけだ」

『ディディディディケイド！』

するとウォッチは消えていき、イッセーは突然お腹を抑えて痛みに苦しむ顔をするがそこには『仮面ライダークウガ』のアークルがあり、俺には白を基調としたドライバー…『仮面ライダーディケイド』のバックルとライドブッカーが現れた

『フゥン？今度はジオウではなくディケイドか…それにクウガとはな！ずいぶんとコロコロ変わる奴だな、貴様…何者だ？』

「俺か？俺は通りすがりの仮面ライダーだ…覚えておけ！変身！」

ライドブッカーからカードを一枚取り出して前に見せつける、それはディケイドが写されたカードで掛け声と同時に裏に持ち変えてバックルにセットする…しばらく待機音を鳴らしてから両側にあるトリガーを押し込んで変身する

『カメンライド、ディケイド』

『さぁて、お先にいかせて貰うぞ』

（細かな変身の説明は飛ばして）完全に変身し終わったら即座に俺は

ライドブッカーをブレードに変えてアナザーに突撃を仕掛けながらイッセーに言い放った
アナザーはダグバをけしかけようとするが、ダグバはそれを無視をして俺はその横を通り過ぎる
『何ィ!?何をしているン・ダグバ・ゼバ!』
『残念ながらアイツの狙いは一人の様だぜ?ハァ!』
俺とアナザーとの戦闘が始まった

『ーーー君は似ているね、あの時のクウガと、少し』

ーーー新たな伝説の始まりが、近付いている……